

# 鳥取県岩美町浦富<sup>うらどめ</sup>5号墳出土資料について

東方仁史<sup>1</sup>

A study on artifacts of the Uradome No.5 Tumulus, Iwami-cho, Tottori, Japan

Hitoshi HIGASHIKATA<sup>1</sup>

## はじめに

本稿で紹介する資料は、岩美町浦富に所在する浦富5号墳<sup>1)</sup>で出土した資料である。1966(昭和41)年に発見・調査されたもので、これまで岩美町誌等で触れられているが(岩美町1968ほか)、報告書が刊行されておらず、古墳と出土資料に関する具体的な様相は明らかになっていない。

今回紹介するのは当館に所蔵されている、同古墳出土資料の一部である。いかなる理由によるものか、出土資料全てが所蔵されている訳ではないが、古墳の時期や性格の一端を明らかにできる資料がそろっている。また、同古墳出土資料の中には錫製耳環が含まれ、須恵器に出雲産と考えられるものがあり、漆書記号が存在するなど、興味深い資料でもある。本稿では、浦富5号墳出土資料の一部である館蔵の資料について報告し、それらからみた浦富5号墳の特徴について触れてみたい。

## 1 立地と周辺の遺跡

浦富5号墳は、鳥取県の東端、岩美郡岩美町浦富に所在する【図1】。岩美町の海岸線は、海岸に迫る岩山地帯と白砂の砂丘地帯とが交互に分布し非常に変化に富んでいる。そうした特色から、山陰海岸国立公園(浦富海岸)に指定されており、地質学的にも重要な地域として世界ジオパークにも認定されている。

浦富古墳群は砂丘地帯(浦富砂丘)にあり、海岸線からは300mほど内陸に築かれる。浦富の集落が広がる「旧砂丘」と、その海側に半月形に形成された「新砂丘」の境界付近にあたり、砂丘の最高点を陸側に数

十m下った所に位置する。浦富砂丘はかつて流れていたと考えられる蒲生川(現吉田川)の河口に形成されたもので、過去には湾口を塞ぎ潟湖が作られたと考えられている。岩美町内には古墳が多く存在し、これまで約450基が確認されているが、海岸地帯では潟湖が埋積・形成された平野を見下ろす丘陵上に密集して営まれることが多い。海岸近くの砂丘上に築かれた浦富古墳群は特異な立地と言える。

浦富古墳群は、それぞれ近接して築かれており、これまで5基の存在が知られる【図2、表1】。このうち4基について調査が行われているが、いずれも砂に完全に埋もれていたため、偶然に発見されたものである。

1号墳は昭和35(1960)年頃井戸掘りの際に発見されている。昭和38(1963)年には、農作業中に2号墳が発見され、木山竹治、県立科学博物館(当時)、岩美中学校社会科クラブによって調査が行われている。横穴式石室から見つかった箱式石棺は、岩美中学校に移築復元されている。3号墳は昭和62(1987)年に、畑地造成中に偶然見つかったものである(岩美町教育委員会1988)。墳丘は既に失われており、規模・墳形等は不明である。横穴式石室内に、柱状節理の安山岩を立て並べて羨道側に横口をつけた石棺状施設が見つかった。保存されることになったため、棺内の調査は行われていないが、石室内で出土した須恵器から、7世紀前半の築造と考えられている。出土遺物の中では、銀象嵌のある鍔が注目される。4号墳については、全く情報が無く不明である。今回紹介する5号墳は、昭和41(1966)年、耕作中に横穴式石室が発見され、同年11月～12月にかけて鳥取県教育委員会によって緊

<sup>1</sup> 鳥取県立博物館 〒680-0011 鳥取市東町2-124

Tottori Prefectural Museum, Higashi-machi 2-124, Tottori, 680-0011 Japan

E-mail: higashikata-hi@pref.tottori.jp

[受領 Received 7 December 2010 / 受理 Accepted 21 December 2010]

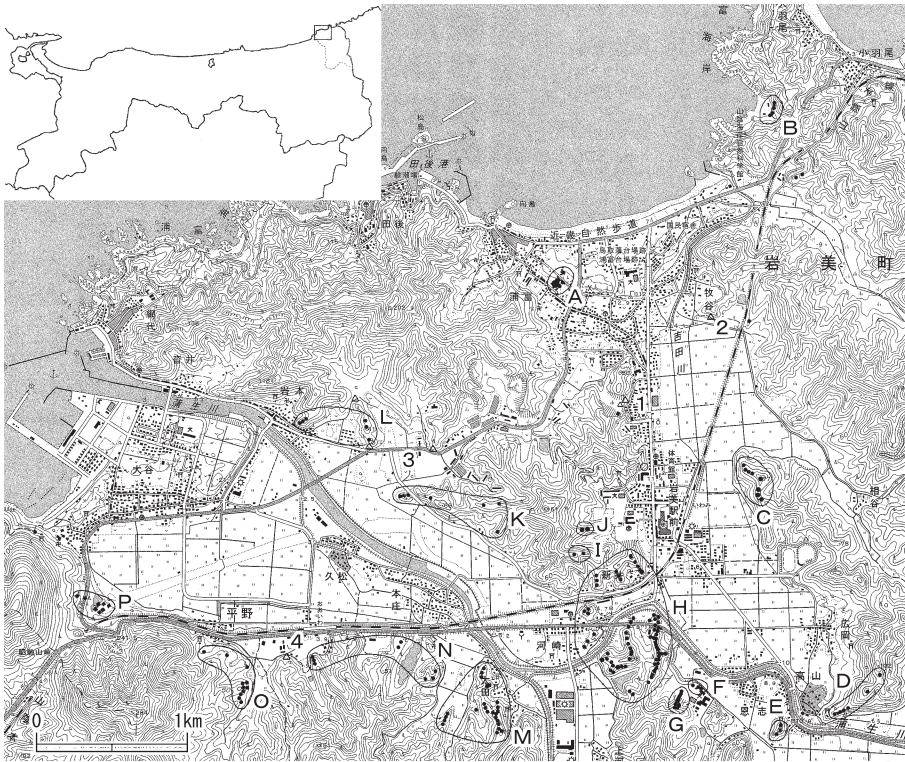


図1. 浦富5号墳周辺古墳分布図(国土地理院発行2万5千分の1地形図〔浦富〕・〔田後〕を使用)  
 A 浦富古墳群 B 熊井古墳群 C 高山下猫山古墳群 D 高山上ノ山古墳群 E 恩志古墳群  
 F 新井三嶋谷古墳群 G 新井南谷古墳群 H 新井古墳群 I 新井下屋敷古墳群 J 新井兵主古墳群  
 K 浦富日ヶ崎古墳群 L 岩本古墳群 M 太田古墳群 N 本庄古墳群 O 平野古墳群 P 小畑古墳群  
 1 浦富横穴墓群 2 牧谷横穴墓群 3 坊谷横穴墓群 4 平野横穴墓群

急調査が行われている(亀井1967)。

これら浦富古墳群の特徴として、墳丘が完全に砂丘に埋没し、発見されるまではその存在が全く分からなかったことが挙げられる。そのうえ、いずれも封土を完全に失っており、石室は新たに堆積した砂に覆われていたようである。浦富砂丘の形成との関係で、その時期や過程を明らかにする一端となろう。また、横穴式石室で天井石が確認された2号墳、5号墳とも、鳥取県東部の千代川以東に多く分布する「中高天井」ではなく(下高1989)、「平天井」である点もまた注目される(岩美町2006)。

## 2 浦富5号墳の概要

5号墳は、古墳群の中で西南端に位置している。古墳は砂丘に完全に埋没しており、耕作中に発見されて緊急の調査が行われた。埋葬施設として横穴式石室が確認されている。右片袖の横穴式石室で、全長8m、玄室長4.4m、幅1.4m、高さ2mをはかり、花崗岩の割石と自然石を積んで築かれる。天井は前述の通り平天井である【図3】。発見時には石室中に砂が充満していたようである。

石室内からは、10体余りの人骨と須恵器47点、玉

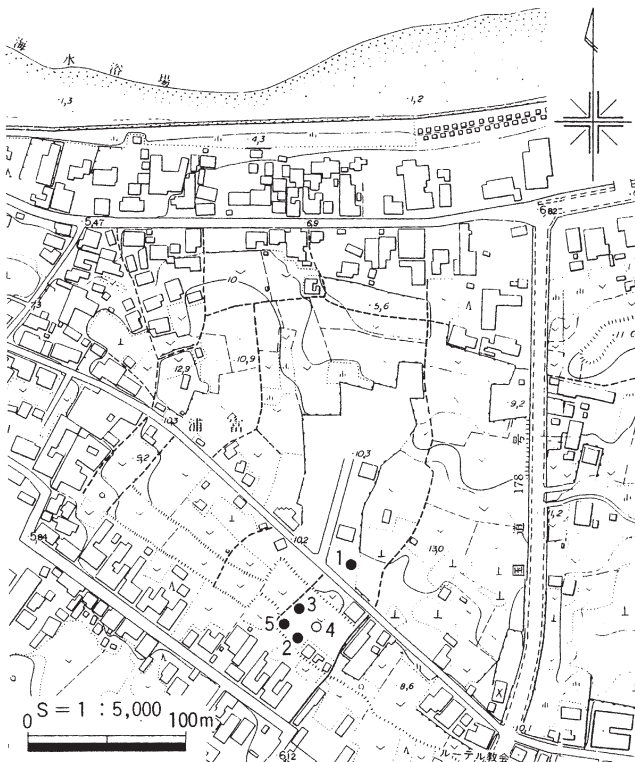


図2. 浦富古墳群分布図(岩美町教育委員会1988より)

表 1. 浦富古墳群古墳一覧

	墳形	埋葬施設	型式	規 模	棺	遺 物
1号墳	不明	横穴式石室	不明	不明	不明	鉄鏃、須恵器、人骨2体
2号墳	不明	横穴式石室	無袖	長さ5m、幅1m～0.8m	箱式石棺	銅環2・金環4、切子玉4・管玉2・小玉2、人骨4体
3号墳	不明	横穴式石室	右片袖	玄室長2.6m、幅1.3m	柱状安山岩を縦に立て並べ平石で蓋をした石棺状の施設	鉄鏃、刀子、弓飾り金具、直刀（鏢に銀象嵌）、須恵器、人骨3体
4号墳	不明	横穴式石室？	不明			不明
5号墳	不明	横穴式石室	右片袖	全長8m、玄室長4.4m、幅1.4m、高さ2m	不明	直刀、刀子、鉄鏃、耳環、玉類、須恵器、土師器、人骨10体

類17点、鉄器類13点が出土した（亀井1967）。当館には須恵器（完形）15点、鉄器26点のほか、須恵器片4点、土師器1点、耳環4点、貝殻1点、炭化木材2点、石1点が所蔵されている<sup>2)</sup>。人骨と玉類の全て、および大半の須恵器については、現在のところ所在不明である。

なお、調査に関する記録については、当館には調査時の写真の一部（35mmモノクロフィルム）、石室および遺物出土位置の略測図の青焼きコピーが存在するのみである<sup>3)</sup>。出土資料のうち、土器類のほぼ全点と鉄製品・玉類の一部、耳環などを故亀井照人氏が実測しており、その実測図が残されている。

### 3 出土遺物

#### (1) 金属製品【図4】

##### 鉄製品

鉄製品として、直刀1点、刀子3点、金具2点、鉄

鏃20点がある。

1は直刀である。刀身の大半と茎の先端を破損するほか、刀身表面の大半が剥離している。関部は両関となり、刃部側は直角関、背側は撫関で、いずれもさほど大きくは切れ込まない。茎は先端に向かって緩やかに幅を減じる。X線写真でも目釘孔は確認できない。茎の表面には木質が残るが、背部には木質が付着しない部位があり、柄の構造を示すものと考えられる。また、刀身の表面にも木質がわずかながら付着しており、鞘に収められていた可能性がある。

2～14は鉄鏃である。いずれも長頸鏃で、頸部は8cm以上とやや長めである。現状で20点が確認できるが、茎部のみ破片が3点あり、同一個体を別々に数えている可能性もある。鏃身部の形態は、三角形、鑿前式、柳葉形がある。2は8本の鉄鏃が錆着したものである。全て鏃身部を同方向に向けるが、向きがやや不揃いであることから、束ねて副葬していたかどう

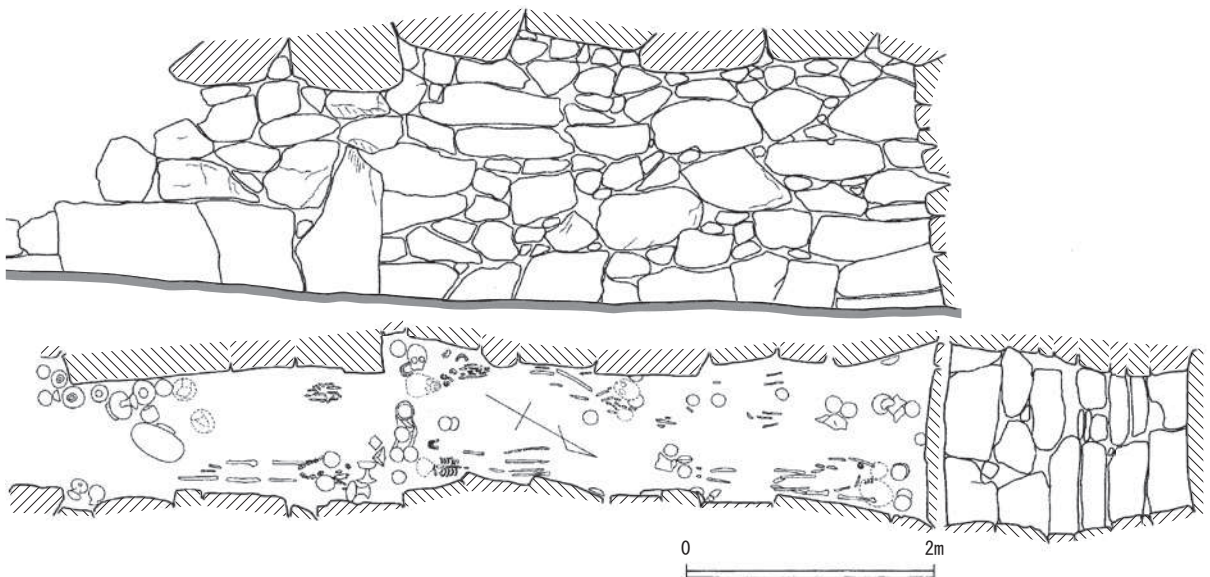


図3. 浦富5号墳石室・遺物出土位置図

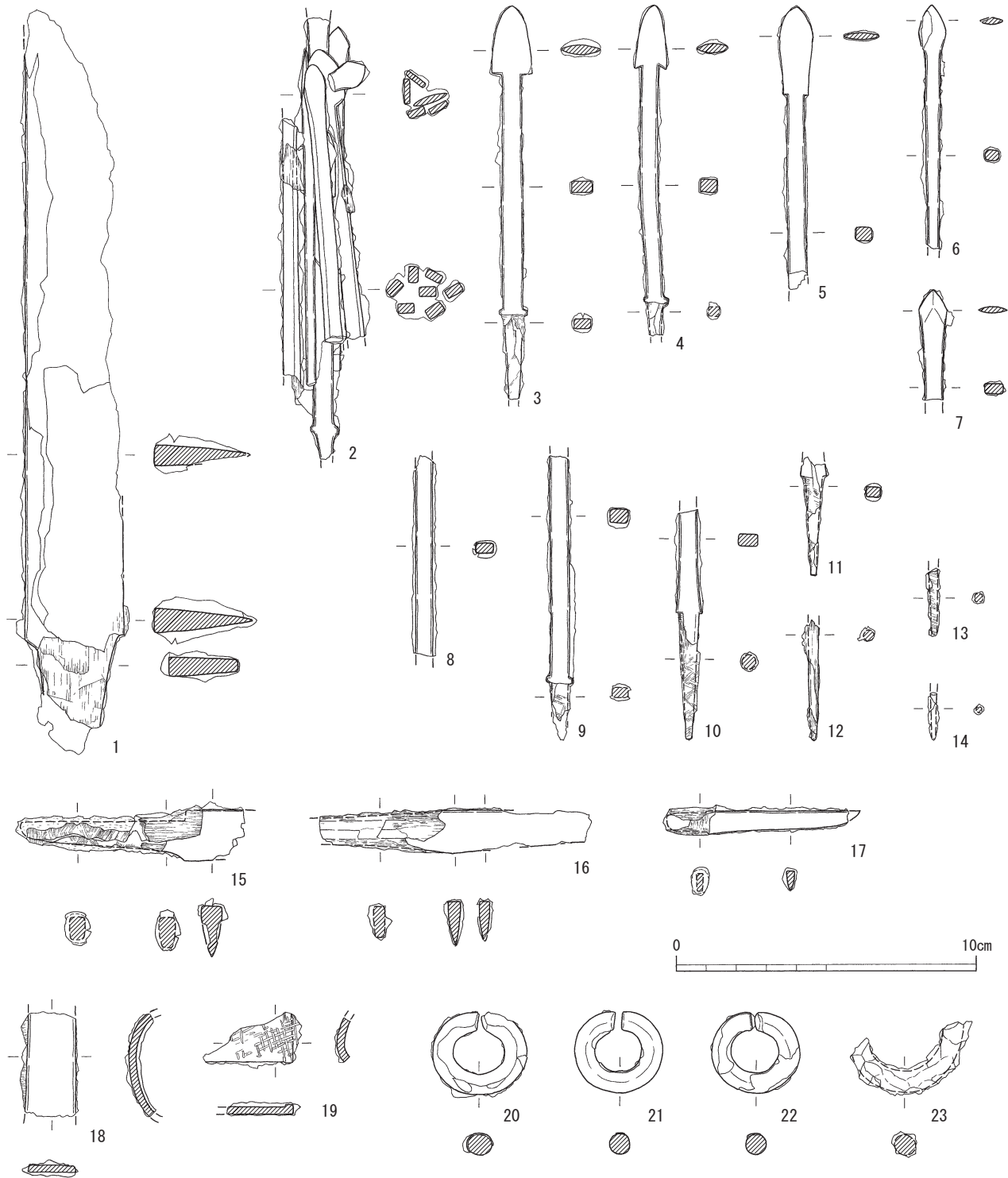


図4. 浦富5号墳遺物実測図①(金属器)

かは不明である。また、部分的に矢柄とは異なる木質が付着するが、性格は明かではない。鏃身部の形態は、三角形2点、鑿前式5点、不明1点である。3～7は鏃身部が残るものである。3,4は三角形、5は柳葉形、6,7は鑿前式である。8は頸部のみの破片、9～11は頸部～茎部の破片。頸部関は棘状のものが多いが、10と11は台形関である。12～14は茎部先端のみの破片

である。これらを含め、茎部が残るものでは表面に有機質が遺存する。関付近では、茎と直行方向に有機質が残存するほか、矢柄本体の木質の下に交差するように巻かれた有機質が見られる。

15～17は刀子である。いずれの柄にも木質が付着する。15は刃部の大半を破損する。関部は両関で、背部は直角、刃部は撫角である。茎の表面には木質が良

好に残存する。全面に幾重にも交差するように巻かれた有機質が認められ、その上を柄縁の部分のみ茎に平行する木質、背と腹は海綿状の有機質が覆う。柄縁は木製、その他は鹿角製の柄があったものと想定される。16は刃部先端と茎先端を欠損する。関部は撫角であるが明瞭ではなく、緩やかに茎に移行する。茎表面には木質が残るが、15のように有機質を巻いていない。側面の中央に山形の部分が遺存しており、柄の内側に空隙があったものか、別材が存在したものと考えられる。17は細く茎も短小である。両関で、いずれも直角である。

18、19は金具である。いずれも内面に木質が残る。18は幅1.7cmで、カーブなどから直刀に伴う装具と考えられる。19は幅3cm以上のもので、表面に目の粗い布(5目/1cm)が銹着する。この布や銹で不明瞭であるが、端部は肥厚するようである。

### その他金属製品

20～23は耳環である。20～22は銅芯に銀板を貼ったものである。腐食が進行しており、銀板の多くが欠損している。21、22は同形同大で、つくりも似ており、セットと考えられる。23は錫製で、環体の2分の1弱が残存する。表面は腐食し、大小のヒビが入っている<sup>4)</sup>。

## (2) 須恵器・土師器【図5、6】

### 須恵器

須恵器は、完形あるいは完形に復元できるもので杯蓋4点、杯身7点、壺1点、高杯3点、長頸壺1点、破片で高杯、器台などがある。

1～4は杯蓋である。1は明瞭な稜を持たず、緩やかにカーブする形態で、天井部を丁寧に回転ヘラケズリする。2は緩やかに盛り上がる天井部に中心が凹むつまみを持ち、内面に口縁部よりも突出するカエリを有する。3は小型の蓋で、杯蓋ではなく直口壺などの蓋の可能性もある。天井部はヘラ切り後ナデで仕上げる。4は輪状つまみで内面にカエリがないもので、口縁部はほぼ垂直に垂下する。つまみ内と上面の2か所に「×」の漆書記号がある。

5～11は杯身である。5はやや径が大きい浅い作りである。底部は丁寧に回転ヘラケズリで調整する。6は底部外面が自然釉に厚く覆われ、調整が確認できない。口縁部は他の個体と異なり、内面側がほぼ垂直に近く立ち上がる形態をとる。7は口縁部の立ち上がりが小さく、底部は静止状態でのヘラケズリにより仕上げられる。8は蓋受部が短小な作りである。ヘラ切り後のナデ調整がほとんど行われず、底部には木目状の圧痕が残る。内部には赤色顔料が多量に残存してい

る。9は径が小さく、口縁部の立ち上がりも短い。10は口縁部直下がくびれる形の杯身である。底部は平底に近く、ヘラ切り後ナデ調整を施す。11は高台のある杯身で、底部外面には回転糸切りの痕を明瞭に残す。体部はやや内湾し、高台はやや高く直線的に広がる形態をとる。底部外面と体部側面に「×」の漆書記号があるが、体部のは剥離して痕跡が残るのみである。

12～15は高杯である。12は無蓋高杯の脚部を取り去ったもので、破面を丁寧に研磨している。口縁端部も摩滅しており、意図的に加工されている。体部には櫛状工具による列点文が施される。13も無蓋高杯の杯部と考えられる。14、15は有蓋高杯で、脚部は低く太い。いずれも脚部にスカシはない。15は杯部と脚部の破片があり、接合しないが胎土や色調から同一個体と考えられる。

16は壺で、やや扁平な胴部を持ち、肩部に幅広の沈線を施す。胴部下半は回転ヘラケズリ。頸部が細く造られているため、内部に穿孔に伴う粘土塊が取り出されずに残っている。17は壺などの口縁部の破片として図示したが、脚付壺などの脚部の可能性もある。18は器台の脚部端と考えられる。凹線が2条残り、波状文が4条巡る。

図6-20は長頸壺で、肩部は明瞭な稜を持ち、上下に2条の沈線が施される。体部下半に1か所、口縁部に3か所、2条1組の沈線が巡らされる。高台はハの字形に開くものでやや長めの形態である。高台中央に沈線が1条巡らされる。口縁部は外反し、外面に段を有する。

### 土師器

土師器は1点のみである。図5-19は杯で、全面に赤色顔料が塗布される。口縁部がやや肥厚し、端面は外傾する面を持つ。内面は口縁直下に段を有する。底部外面はヘラケズリの後ミガキ調整されるが、体部上半は幅広の板状工具で整えられる。

## (3) その他

「浦富古墳出土」と描かれた小箱に入ったもので、二枚貝の貝殻1点、炭化材2点、石1点がある。貝の種類は「コタマガイ」で、調査時の写真によれば須恵器杯身上から見つかった【図7】。炭化材の出土位置は不明である。

## 4 若干の考察

### (1) 時期

時期を考えるにあたって、須恵器の検討を行う。な

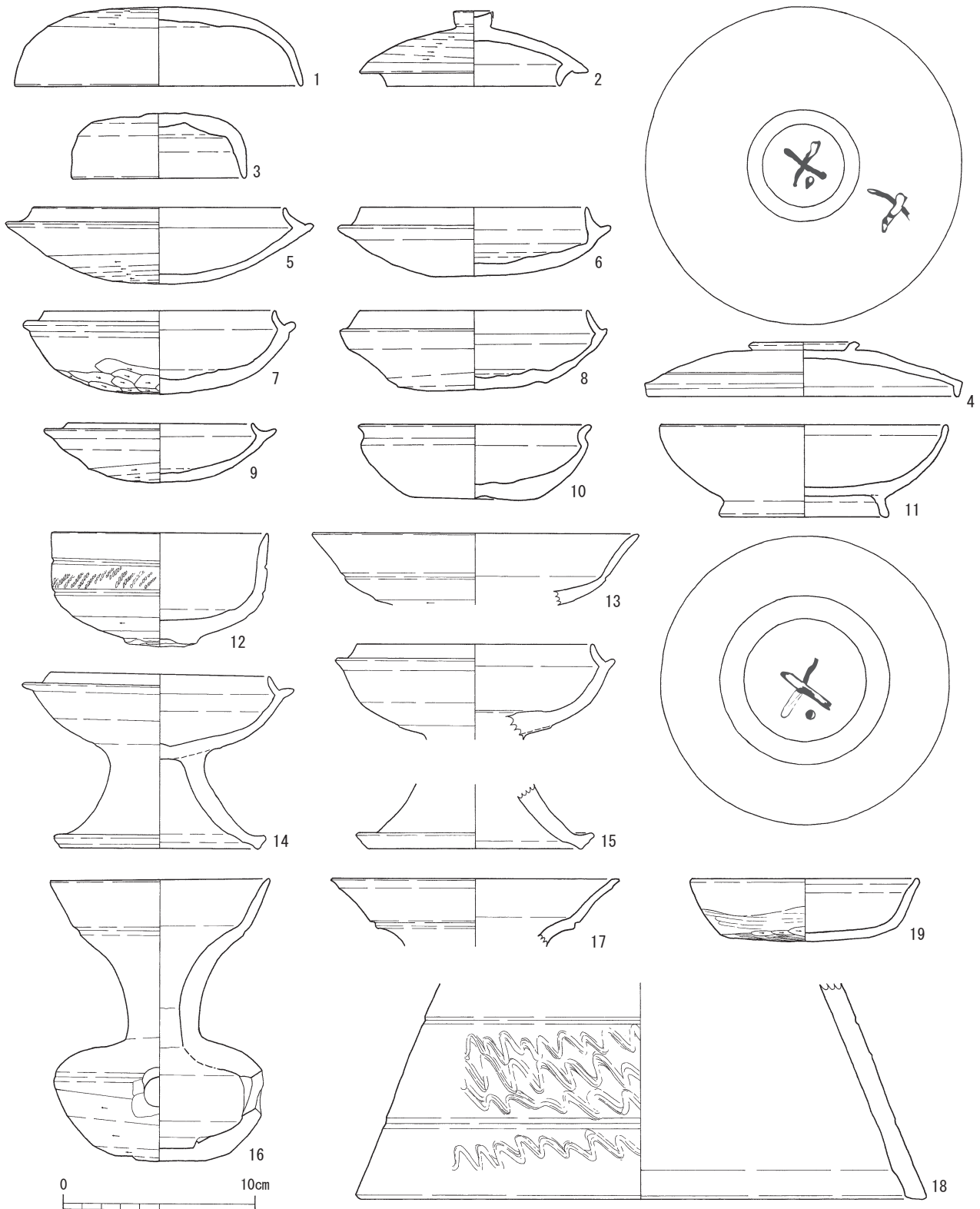


図5. 浦富5号墳遺物実測図②（須恵器・土師器）

お、鳥取県東部（因幡）においては古墳時代の須恵器編年が確立されておらず、古代についても伯耆の成果を援用するにとどまる（中森2010）。今回は陶邑編年（田辺1981）および出雲編年（大谷1994、岡田2010）などから時期を推定していく。

須恵器のうち、蓋杯類は形態がかなりバラエティに富んでいる。受部をもつ杯身は、底部調整が①回転ヘラケズリ（5、9）、②静止状態でのヘラケズリ（7）、③ナデ（8）がある。①のうち、9は立ち上がりが短く、径も小さい。陶邑編年で、杯身5と6がTK209（6世紀末）

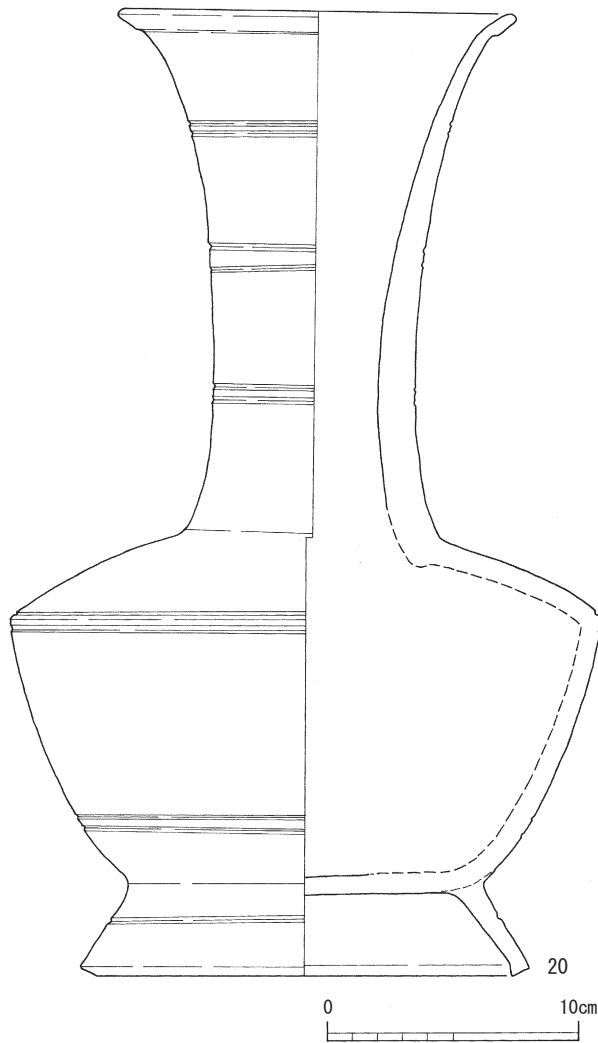


図6. 浦富5号墳遺物実測図③(須恵器)

に並行すると考えられ、蓋1もこの時期に比定できる。また、9はTK217(7世紀前葉)に並行すると考えられる。10は出雲産杯身のI類A1型式にあたる。7世紀後半の時期が想定できる。11は糸切り底で内湾する体部とハの字に開く高めの高台を持つ杯身で、10同様に出雲

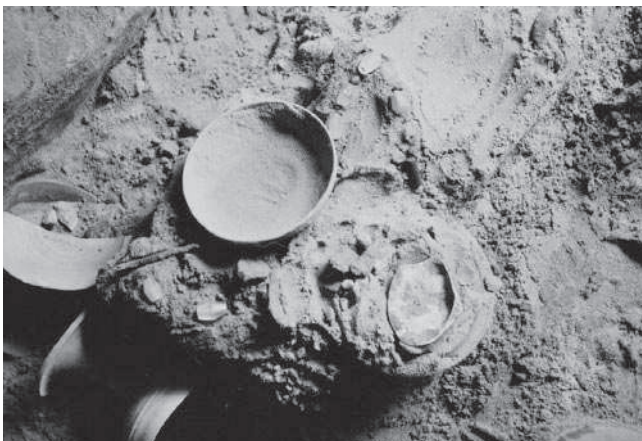


図7. 貝殻出土状況

産と考えられる。出雲の杯身II A類のうち、A3a型式にあたる。この杯身に、同じく出雲産と考えられる輪状つまみの蓋4が伴うと考えられる。蓋4は、蓋II類のうちC2型式にあたる。このセットは出雲編年のIII期に該当し、7世紀末～8世紀前葉に比定できる。同時期の出雲産須恵器は、近隣では南東約1kmのところの位置する浦富4号横穴墓でも出土が知られる(中島2003)。6の静止状態ヘラケズリは、近隣では高野坂2号横穴墓での出土がある(岩美町教育委員会1992)程度で、類例は少なく他地域からの搬入品と考えられる。

土師器杯は、やや小型で全面に赤色顔料を塗布し、底部をケズリの後ミガキ調整するもので、口縁部内面に段を持つ。そうした特徴から、畿内産と考えられる。時期は7世紀末～8世紀前葉であろう。

土器類からは、6世紀末に築造され、7世紀末～8世紀前葉まで長期にわたり使用されたことが窺える。10体余りの人骨が確認されたという事実からも、かなり長期にわたって埋葬の場として追葬が行われたことが推定されるが、土器類の様相もそれを裏付ける。その他の資料の年代観もこの間におさまるので、副葬品として問題はない。

なお、詳細な埋葬回数・時期については、全ての須恵器の分析を行ったわけではないので、今後の課題としたい。

(2) 錫製耳環について

浦富5号墳からは、3点の銅芯銀貼りの耳環と、1点の錫製耳環が出土している。錫製耳環は2分の1以上を破損しているが、環状を呈している。銅芯銀貼耳環よりもやや大きく、大きさからすると耳環とするよりも環状製品とするのが適切かもしれないが、さしあたって耳環としておく。

県内では、管見の限り6基の古墳・横穴墓で、銅芯金貼(鍍金)・銀貼でない耳環が出土している【表2】。錫製・鉛製の耳環については、これまで県内の出土資料で成分分析をした例はほとんどない。青銅に特徴的な緑青が生じていないこと、鉛であれば腐食により白色を呈しやすいこと、錫は鉄に外見が似るがひび割れが顕著であること、いずれも硬度が低いため変形しやすいこと、などから肉眼および写真で判断した。

錫製は、浦富5号墳の他、材質分析を行っていないため確言できないが、江府町北谷ヒナ1号横穴墓(江府町教育委員会1990)、陰田横穴墓群(米子市教育委員会ほか1984)に推定できる耳環が存在する。鉛製は、倉吉市服部36号墳(倉吉市教育委員会1973・1974)、鳥取市用瀬町余井古墳(用瀬町教育委員会1979)での

表 2. 鉛・錫製耳環出土古墳・横穴墓

	古墳名	所在地	墳形・規模	埋葬施設	耳環	その他の遺物	時期
1	浦富 5 号墳	岩美町浦富	不明	横穴式石室	錫 1、銅 3	刀、鏃、刀子、玉類、須恵器、土師器	6c末～8c初
2	余井古墳	鳥取市用瀬町余井	円、12 m	横穴式石室	鉛 2、銅 1	刀、鏃、刀子、馬具、鎌、斧、須恵器	7c初頭
3	服部 36 号墳	倉吉市服部	円、18 m	横穴式石室	鉛 1、銅 2	刀、鏃、刀子、玉類、須恵器	6c後葉
4	陰田 14 号墓	米子市陰田		横穴墓	鉛 ?2、銅 3	刀、鏃、刀子、馬具、玉類、須恵器	6c末～7c中
5	陰田 27 号墓	米子市陰田		横穴墓	錫 ?1	鏃、刀子、須恵器、土師器	7c前～中
6	北谷ヒナ 1 号墓	江府町北谷		横穴墓	錫 ?1	刀、刀子、玉類、須恵器	6c末～7c初

出土がある。これら古墳・横穴墓の築造時期は、6世紀後葉～7世紀中葉である。古墳の規模、埋葬施設、副葬品においては特に共通性はなく、一般的な後期の古墳・横穴墓であると言えよう。ただ、西部において、錫製耳環が横穴墓で出土するのが目につく。

古墳時代の錫製品については、成瀬正和や小嶋義孝らによって集成され(成瀬 1989、小嶋 1996)、また、特定地域での様相について比佐陽一郎により検討が行われており(比佐 2004)、畿内に少なく関東・東北地方を中心に地方に多く分布することが指摘されている。鉛製耳環も含め、こうした銅芯金貼(鍍金)・銀貼でない耳環は、畿内以外に分布すること、出土状況に規則性が見られないことなどから、地方での製作の可能性も考えられている。なお、比佐は錫・鉛製の耳環の性格にまで踏み込んでおり、「銀を用いた耳環の代用品的な位置付けにあり、決して積極的に求められるものではなかった(比佐 2004, p.99)」とする。鳥取県内における出土状況についても、西部において横穴墓での出土が目立つ程度で特に規則性があるとは言えず、この見解を裏付けている。

### (3) 漆書記号について

須恵器のうち、杯蓋 4 と杯身 11 には「×」状の記号が漆で描かれていた。いずれも外面の中心部分と側面の 2 か所に描かれる点や漆の色調・線の運びが共通しており、同時に記号が付されたと考えられる。

こうした漆書記号については谷本進、三木雅子らの集成があり、但馬を中心に山陰地方に多く分布することが明かにされている(谷本 1995、三木 2005)【図 8】。記号の性格については、古墳における祭祀に際して付されたものとされている。県内では、米子市石州府古墳群で漆書記号の描かれた須恵器が 50 点以上確認さ

れている(米子市教育委員会ほか 1989)ほか、湯梨浜町長瀬高浜遺跡でも漆書記号のある須恵器が出土している。これらは本古墳例よりもやや古く、7世紀前葉～後葉にかけてのものであるが、石州府古墳群では、同様に「×」印も認められる。漆書記号は鳥取県東部の古墳では初めての確認で<sup>5)</sup>、但馬北西部で同時期の漆書記号が見つかっており、関連が窺える。

また、既述のとおり、杯身 8 の内部には赤色顔料が多量に付着しており、あたかも顔料を入れていたかのようなのである。分析はしておらず成分は不明だが、漆書記号とは明らかに異なる色調である。朱書記号のある土器と赤色顔料を入れた壺が共伴する例があるが、浦富 5 号墳では朱書記号は見つからない。所在不明の資料中にあるのかもしれないが、記号用の顔料とは別の意味を考える必要があろう。



図 8. 漆書記号の出土地 (三木 2005 を改変して作成)



## (4) まとめ

浦富5号墳は、古墳時代後期後葉、6世紀末に築かれ、7世紀末～8世紀前葉まで追葬が行われたと考えられる。その回数は、検討していない資料があるため不明だが、10体という多量の人骨の存在を考えると、複数回にわたり埋葬が行われたとみて間違はないだろう。浦富古墳群内の他の古墳を見てみると、内容の分かる3号墳には長期にわたる利用の痕跡はなく、5号墳のみの特異な点と言えるかもしれない。

副葬品を見てみると、他地域との関係を窺わせる資料が目につく。須恵器のうち、輪状つまみ蓋・高台付杯身は器形から出雲産と考えられる。そうした他地域産の須恵器に、但馬などで多く見られる「×」の漆書記号が付されることは、被葬者像を考える上で興味深い。同じく出雲産と考えられる須恵器に、当古墳同様「×」の漆書記号が書かれた兵庫県香美町知見古墳の例(谷本1995)などが注目される。

浦富5号墳は、海岸に近い砂丘上に立地し、他地域との関係を窺わせる副葬品が見られることが特徴である。砂丘によって作られた潟湖がこの時期まで存在し、天然の良港として機能したとすると、被葬者は海上交通との関係が深いことが想像される。

## おわりに

今回紹介した浦富5号墳出土資料は一部であり、前述の通り残りは現在所在が不明である。しかし、本稿により、これまでほとんど知られていなかった本古墳の副葬品の主要部分が明らかになったといえる。砂丘地という立地もさることながら、副葬品に他地域との関係を窺わせる特徴的な点が多々あることが明らかになった。今後も所在不明資料の調査を続け、所在が明らかになった際にはそれらの資料もあわせ、再度本古墳について検討することとしたい。

浦富古墳群出土資料については、資料の探索等で岩美町教育委員会中野智氏の手を煩わした。また、資料のX線撮影においては、鳥取県埋蔵文化財センターにお世話になった。記して感謝申し上げます。

## &lt;註&gt;

1) 当館での資料登録名は「浦富4号墳」であり、須恵器の注記として「岩美町浦富古墳」と記入されている。また、故亀井照人氏の実測図には「浦富2号墳」と書かれている。本稿では、岩美町誌などの記述に従い、「浦富5号墳」としている。しかし、4号墳が詳細について全く不明なこと、資料が「浦富4号墳」として登録されていること、古墳群の古墳は全て砂に埋没し偶然の発見であったことなどから、「4号墳」が

果たして実際に確認されたことがあるのか疑問を抱いている。あるいは「4号墳」と「5号墳」とが同一古墳であるなど、情報の混乱が生じた可能性も捨てきれない。

- 2) 鉄器の数が増加しているが、これは銹着した鉄鏃8点を1点として数えた可能性が高いほか、保管中に破損した可能性も考えられる。耳環については記述がないが、故亀井氏による実測図中にあることと、入れられていた箱の注記から浦富5号墳出土品と判断した。このほか、故亀井氏による実測図には、須恵器として杯蓋14点、杯身11点、椀2点、高杯2点、長頸壺3点、提瓶1点、横瓶1点と、玉類として瑪瑙製勾玉2点、碧玉製管玉2点、水晶製切子玉8点、ガラス小玉4点などがある。当館に現在収蔵されるものは、展示に使用するなどのために特徴的な資料を選択した可能性がある。残りの資料は別の場所に保管されている可能性が高いと考えるが、現段階では所在不明である。今後も調査を続けたい。
- 3) 岩美町(1968)に掲載されている出土状況図と同じものである。図3はこの青焼きコピーをトレースしたものであるが、断面の斜線は追加している。なお、原図は所在不明である。
- 4) この錫製耳環については、平成18年度埋蔵文化財担当者専門研修(於:奈良文化財研究所)の保存処理課程I(無機質遺物)を受講した際に持参し、実際に蛍光X線分析を行った。その結果、錫製であることが判明した。分析に際しては、降幡順子氏にお世話になった。
- 5) 2010年に行われた鳥取市高住平田遺跡の調査で、河川の中から出土した須恵器蓋の輪状つまみ内側に「×」「△(乙?)」などの漆書記号が書かれたものが出土している(鳥取県教育文化財団2010)。なお、本遺跡の漆書記号については、鳥取県教育文化財団田中正利氏に実見に際してお世話になり、多くの教示を受けた。

## &lt;参考文献&gt;

- 岩美町(1968)『岩美町誌』。  
 岩美町(2006)『新編岩美町誌』。  
 岩美町教育委員会(1988)『浦富3号墳発掘調査報告』岩美町文化財調査報告書 第10集。  
 岩美町教育委員会(1992)『高野坂古墳群発掘調査報告書』岩美町文化財調査報告書 第17集。  
 大谷晃二(1994)「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集, 島根考古学会: pp.39-82。  
 岡田裕之・古代土器検討グループ(2010)「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』, 島根県古代文化センター: pp.13-43。  
 亀井照人(1967)「古代を発掘する」『郷土と科学』12-2, 鳥取県立博物館: pp.5-9。  
 倉吉市教育委員会(1973)『服部遺跡発掘調査報告(遺構篇)』。  
 倉吉市教育委員会(1974)『服部遺跡発掘調査報告(遺物篇)』。  
 江府町教育委員会(1990)『北谷ヒナ横穴群発掘調査報告書』江府町埋蔵文化財発掘調査報告書1。  
 小嶋芳孝(1996)「蝦夷とユーラシア大陸の交流」『古代王権と交流1 古代蝦夷の世界と交流』, 名著出版: pp.399-437。

下高瑞哉 (1989) 「鳥取県東部における中高式天井石室に関する一考察」『鳥根考古学会誌』第6集, 鳥根考古学会: pp.1- 18.  
 田辺昭三 (1981) 『須恵器大成』角川書店.  
 谷本進 (1995) 「朱書記号と漆書記号の展開」『但馬考古学』第9集, 但馬考古学研究会: pp.1- 15.  
 鳥取県教育文化財団 (2010) 『高住平田遺跡の調査』現地説明会資料.  
 中島伸二 (2003) 「浦富横穴墓群」『特別研修「調査員が語る発掘調査」』平成14年度埋蔵文化財発掘技術研修会資料, 鳥取県埋蔵文化財センター: pp.22- 27.  
 中森祥 (2010) 「因幡・伯耆における古代土器の編年とその様相」『出雲国の形成と国府成立の研究』鳥根県古代文化センター: pp.85- 102.

成瀬正和 (1989) 「わが国上代の工芸材料としての錫」『正倉院年報』第11号, 宮内庁正倉院事務所: pp.23- 34.  
 比佐陽一郎 (2004) 「錫、鉛製耳環に関する基礎的検討」『古文化談叢』第50集(下), 九州古文化研究会: pp.83- 102.  
 三木雅子 (2005) 「名和飛田遺跡出土の彩色記号をもつ須恵器について」『名和飛田遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書104: pp.213- 218.  
 用瀬町教育委員会 (1979) 『余井古墳調査報告書』.  
 米子市教育委員会・建設省中国地方建設局倉吉工事事務所 (1984) 『陰田』.  
 米子市教育委員会・石州府古墳群調査団 (1989) 『石州府古墳群発掘調査報告書』.

浦富5号墳出土資料計測・観察表 [単位: cm、△: 残存値(復元値)]

挿図	資料名	全長	刃部長	刃部最大幅	刃部厚	茎部長	茎部最大幅	茎部厚	分類番号
図4-1	鉄刀	△ 24.8	△ 20.8	3.3	0.8	△ 0.5	2.5	0.6	725 020

挿図	資料名	型式	全長	鍔身部長	鍔身部最大幅	頸部長	頸部最大幅	頸部厚	茎部長	分類番号	備考
図4-2	鉄鍔		△ 8.8				0.6	0.3		721 028	A
図4-2	鉄鍔	鑿前	△ 11.0	0.8	1.0		0.6	0.3		721 028	B
図4-2	鉄鍔	鑿前	△ 9.3	0.7	0.8		0.6	0.3		721 028	C
図4-2	鉄鍔	三角形	△ 9.7	1.8	1.3	△ 7.9	0.6	0.3		721 028	D
図4-2	鉄鍔	三角形か	△ 11.0	2.5		7.8	0.6	0.3	△ 0.7	721 028	E
図4-2	鉄鍔	鑿前	△ 12.8			△ 10.7	0.6	0.3	△ 2.1	721 028	F
図4-2	鉄鍔	鑿前	△ 11.5	0.6	0.8	△ 10.9	0.6	0.3		721 028	G
図4-2	鉄鍔	鑿前	△ 1.6	0.7	0.9	△ 0.9	0.6	0.3		721 028	H
図4-3	鉄鍔	三角形	△ 13.1	2.3	1.3	8.0	0.7	0.4	△ 2.8	721 029	
図4-4	鉄鍔	腸挟三角形	△ 11.0	2.2	1.1	8.0	0.6	0.4	△ 1.1	721 030	
図4-5	鉄鍔	柳葉	△ 9.4	3.0	1.1	△ 6.4	0.6	0.4		721 031	
図4-6	鉄鍔	鑿前	△ 8.1	1.5	△ 0.9	△ 6.6	0.4	0.4		721 032	
図4-7	鉄鍔	鑿前	△ 3.6	0.7	0.9					721 033	
図4-8	鉄鍔		△ 6.7				0.6	0.3		721 034	
図4-9	鉄鍔		△ 9.4			△ 7.6	0.6	0.4	△ 1.8	721 035	
図4-10	鉄鍔		△ 7.7			△ 3.5	0.8	0.4	4.2	721 036	
図4-11	鉄鍔		△ 4.0			△ 0.6	0.8		3.4	721 037	
図4-12	鉄鍔		△ 4.0							721 038	
図4-13	鉄鍔		△ 2.3							721 039	
図4-14	鉄鍔		△ 1.5							721 040	

挿図	資料名	全長	刃部長	刃部最大幅	刃部厚	茎部長	茎部最大幅	茎部厚	分類番号	備考
図4-15	刀子	△ 7.5	△ 2.0	1.7	0.7	5.5	1.0	0.5	722 021	鹿角装
図4-16	刀子	△ 9.0	△ 4.6	1.4	0.3	△ 4.4	1.4	0.4	722 022	
図4-17	刀子	△ 6.0	△ 4.7	0.7	0.3	1.3	0.6	0.2	722 023	

挿図	資料名	全長	幅	厚	分類番号	備考
図4-18	金具	3.5	1.7	0.3	729 024	
図4-19	金具	1.6	△ 3.0	0.3	729 024	布付着

挿図	資料名	材質	縦	横	環体径	開き部幅	分類番号
図4-20	耳環	銅地銀貼	2.8	3.2	0.8	0.2	711 104
図4-21	耳環	銅地銀貼	2.7	2.9	0.7	0.3	711 105
図4-22	耳環	銅地銀貼	2.7	2.9	0.7	0.2	711 106
図4-23	耳環	錫	△ 4.0	△ 2.4	0.7	—	711 107

挿図	資料名	器種	口径	器高	底(脚)径	胎土	色調	焼成	分類番号	備考
図5-1	須恵器	杯蓋	14.8	4.1		密、径1mm以下の砂粒若干含む	7.5Y7/1 灰白	堅緻	213 333	44
図5-2	須恵器	杯蓋	9.9	3.9		密、砂粒わずかに含む	10Y6/1 灰	堅緻	213 340	39
図5-3	須恵器	杯蓋	8.9	3.4		密、砂粒やや多く含む	5PB5/1 青灰	堅緻	213 344	43
図5-4	須恵器	杯蓋	16.0	2.8		密、砂粒わずかに含む	10YR4/1 褐灰	堅緻	213 338	3、漆書記号
図5-5	須恵器	杯身	13.1	4.0		密、径2mm以下の砂粒若干含む	2.5Y7/1 灰白	堅緻	213 332	33
図5-6	須恵器	杯身	11.7	3.5		密、径1mm以下の砂粒やや多く含む	10YR4/1 褐灰	堅緻、自然釉	213 334	19
図5-7	須恵器	杯身	12.0	4.3		密、径1mm以下の砂粒若干含む	5YR4/3にふい赤褐	堅緻	213 339	26
図5-8	須恵器	杯身	11.8	4.2		密、砂粒若干含む	5Y5/1 灰	堅緻	213 335	内面に赤色顔料
図5-9	須恵器	杯身	9.6	3.1		密、径1mm以下の砂粒多く含む	2.5Y5/1 黄灰	堅緻	213 341	28
図5-10	須恵器	杯身	11.8	3.9		密、砂粒若干含む	5BG4/1 青灰	堅緻	213 336	11
図5-11	須恵器	杯身	14.7	4.8		密、砂粒わずかに含む	5PB4/1 暗青灰	堅緻	213 337	6、漆書記号
図5-12	須恵器	無蓋高杯	11.1	△ 5.9		密、砂粒やや多く含む	10YR6/2 灰黄褐	堅緻、自然釉	212 011	9
図5-13	須恵器	無蓋高杯	△ 16.8	△ 3.8		密	10Y5/1 灰	堅緻	053 005	1/3 残存
図5-14	須恵器	有蓋高杯	11.3	9.1	11.1	密、径1mm以下の砂粒やや多く含む	7.5GY5/1 緑灰	良好	214 040	41
図5-15	須恵器	有蓋高杯	△ 12.1	△ 11.3	△ 11.0	密、砂粒若干含む	5Y6/1 灰	やや甘い	053 005	41 (脚部)
図5-16	須恵器	甗	11.3	14.6		密、砂粒若干含む	5Y7/2 灰白	やや甘い	215 021	
図5-17	須恵器	甗か	△ 14.9	△ 3.5		密、砂粒わずかに含む	5Y6/1 灰	堅緻	053 005	脚部か
図5-18	須恵器	器台		△ 11.2	△ 29.2	密、径1mm以下の砂粒やや多く含む	5YR4/1 褐灰	堅緻	053 005	
図6-20	須恵器	長頸壺	15.2	38.3	16.4	密、小礫若干、砂粒やや多く含む	7.5Y5/1 灰	堅緻	210 050	
図5-19	土師器	杯	11.7	3.3		密、砂粒若干含む	5YR7/6 橙	良好	142 008	4、赤彩

※色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帳」(2004年版)による。